

令和3年度山梨県南都留郡地域教育フォーラム提案書

特定非営利活動法人かえる舎

代表理事 斎藤和真

地域で育てる

～地域で育ち、地域で生きる子どもの育成～

教育は地域の未来だ。

地域の豊かな未来のために地域と学校と一緒に子どもを育てる必要がある。
「この地域に生まれてよかった」「地域の役に立ちたい」「もっと学びたい」
学びと活気で溢れた地域の未来を作っていくためにできることは何か。

(1) 活動が必要な背景

富士吉田市 毎年 500 人前後の人口減←社会減が7割！
問題の原因：若い世代の都市部への流出！

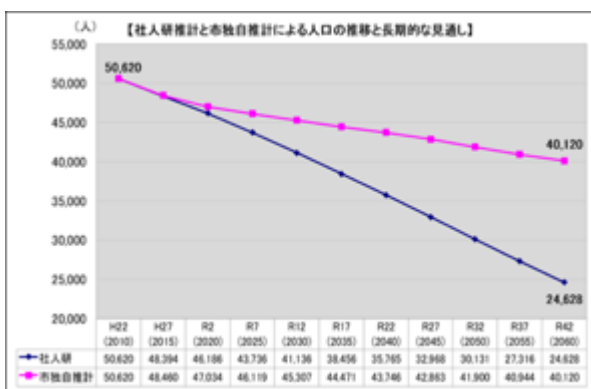
● 人口減少社会が到来し、若者の地域離れが顕在化

活動場所である富士吉田市は、年間 約 500 人ずつ人口が減少している。

理由は7割を占める社会減と呼ばれる若者の都市部への流出だ。

〈 人口減少社会 〉

グラフ1：人口の推移



(富士吉田市, 第6次富士吉田市総合計画, 2018)

このままでは10年後は、人口40,000人以下となり、労働人口の低下、市の財政問題、高齢化社会となり多様な課題が浮き彫りとなる。社会減に歯止めをかけるために、今から若者の地域の一員である意識を醸成していく必要がある。

(2) 活動の目的

「この地域の未来は私たちが創る！」
意思ある若者の育成←高校時代の地域での実践的な活動が鍵！

人口減少は「この地域が好き」で「この地域の役に立ちたい」と地域定着に向けて前向きに行動できる若者が増えることで解消されるはずだ。そのために「地域当事者意識」を養うべく、地域での実践的な活動を高校生に提供する。

活動の中で「①地域の魅力発見」、「②地域での成功体験」、「③仲間との協働の意義」を生徒に提供し、地域当事者意識を醸成していく。

1

タネ撒き

- ・ 魅力発見
- ・ 課題解決企画/提案

地域への入り口。関心を持つことから始まり、企画を提案してみる。
種を植えた段階。



2

萌芽

- ・ 魅力発信情報収集
- ・ 解決企画実践準備

準備を進めていく中で地域の仲間が増えていく。一緒に手を動かす仲間、協力してくれる地域の方々。
種に水をあげ、芽が出始した。



3

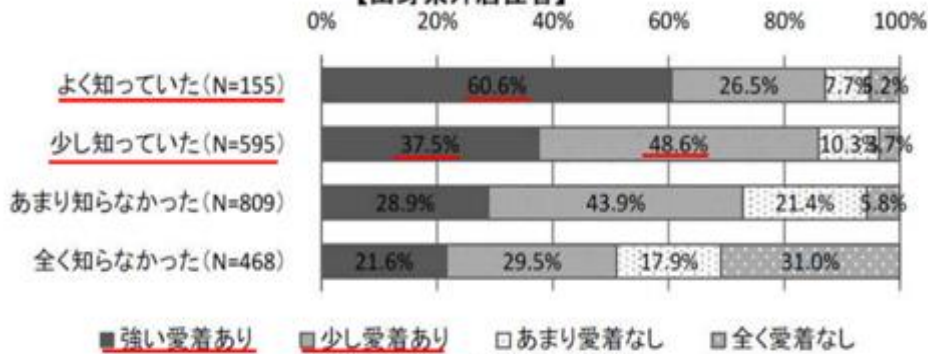
開花

- ・ 発信
- ・ 実践

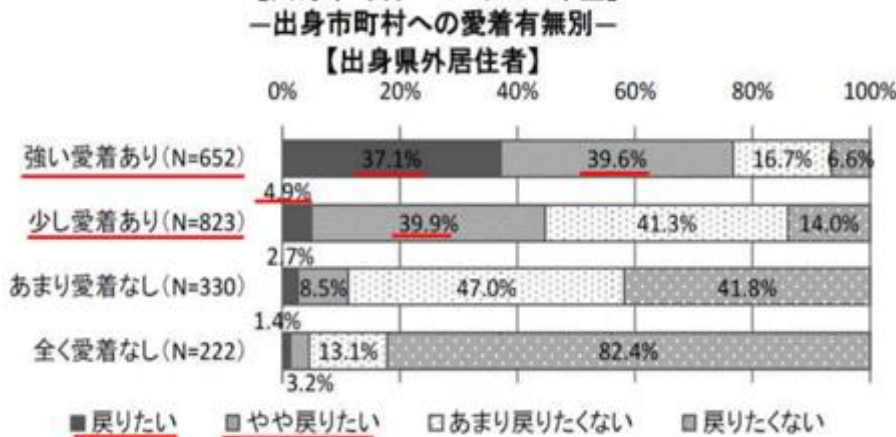
実践は開花だ。花を見てもらい、綺麗だねと声をかけてもらうことで、また来年も喜んでもらいたい気持ちが生まれる。
活動の花が満開の地域へ。



【出身市町村への愛着】
—高校時代までの地元企業の認知程度別—
【出身県外居住者】



【出身市町村へのUターン希望】
—出身市町村への愛着有無別—
【出身県外居住者】



出身市町村への愛着・市町村へのUターン希望は、高校時代に地元企業を知ったことが、転出後も出身地への愛着として残り、Uターン希望につながっている。

(独立行政法人 労働政策研究・研修機構, 地方における雇用創出, 2017)

地元企業について知る機会や、愛着を持ちたくなる感動・成功体験があることで、地域定着の誘引となる。自らの意思や思いを持ちながら、地域のために活動できる人材が増えることは地域の未来にとって必要不可欠だ。

▼具体例：

M・Kさん (大学生 富士吉田市在住 19歳)

高校時代に地域をPRする活動に参画。活動後、県内進学を希望。高校卒業後も地域と関わりながら大学で学び、将来は地域活性に携わる仕事に従事することを希望。

H・Fさん (織物業勤務 富士吉田市在住 25歳)

高校時代の地域活動より、郷土愛が萌芽。大学進学後、IT企業に就職し東京にて勤務。東京勤務中にUターンを検討し、市内の地場産業体験事業に参加。その後、地場産業の織物に転職。

(3) 地域と学校の協働の実例

<富士吉田市と山梨県立富士北稜高校の6年間>

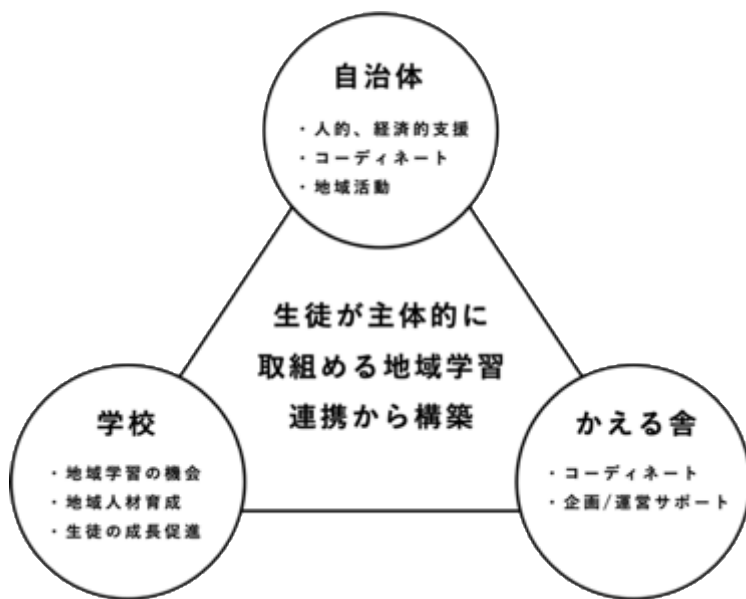
①活動のはじまり

●富士吉田市概要

富士吉田市は人口47,851人（令和3年8月1日）の高原都市である。富士山の水を生かした産業や観光が有名だ。若年層の人口減少が顕著で、人口減少対策が市の重点課題として挙げられる。

●富士北稜高校概要

富士北稜高校は富士吉田市に位置する総合学科高校で、工業、商業、福祉、教養とさまざまな分野の人材育成に貢献している。「地域の明日を拓く」という目標の実現のため、地域と連携した実践的な学習プログラムの構築を課題としていた。



●体制

2016年：連携開始

2017年：富士吉田市と富士北稜高校の包括的連携協定締結

地域で高校生の実践的な活動を支えるために自治体、高校で連携協定を締結した。協定に基づき、事業を実施していく中で実働としてかえる舎が間を取り持っている。それぞれの役割は左図の通りだ。強みをいかし合い事業を推進している。



②6年間のすすみ

<p>(2016-2017)</p> <p>黎明期</p> <p>あれ、誰？</p> <p>探究学習 年間15時間 先行学習者集団 34名 プロトタイプ化を試みる</p>	<p>(2018-2019)</p> <p>拡大期</p> <p>やりすぎた…</p> <p>年間授業計250時間 地域も先生も疲弊… 広く薄い活動は意味も薄い！</p>	<p>(2020-2021)</p> <p>成熟期</p> <p>役割と効果を明確化</p> <p>生徒の重点課題フォーカス 教員と地域と明確な役割 納得感と成長実感のバランス◎</p>
--	--	--

黎明期＝「こんにちはかえる舎です！」

●きっかけ

学校：地域探究学習プログラム構築に関する時間と経験がない

地域：若い世代に地域の魅力を届ける機会がなく地域外への流出が顕著

●目標設定

学校と地域が協働し、地域探究プログラムを実施

「①生徒の生きる力を育てる」

「②生徒が地域に役立つために学びたいと思える意欲を育てる」

●実施概要

探究学習：年間15時間 対象：2学年500名ほど

先行者学習集団：34名

●効果

実施後の生徒の感想による手応え

「知らないだけで、地域はこんなに素晴らしい」

メディアに多く取り上げられる（新聞などのメディア掲載年間20以上！）

●課題

授業の再現性を高めることが必要→パッケージ化していく必要性が発生

拡大期＝「完成形ふるさと納税連携事業」

●重点施策

継続実施が可能なプログラム開発→ふるさと納税連携事業の開発！

●実施概要

探究学習：年間15時間 対象：2学年500名ほど

先行者学習集団：40名

総合ビジネス系列課題研究：計100名ほど

●効果

パッケージ化されて連携がスムーズ化！

対象を拡大することが可能に！授業で目指すゴールと、地域が目指すゴールが一致！

●ふるさと連携事業例

富士北稜高校 総合ビジネス系列 観光コース 商品開発の授業（年間 25 時間ほど）

この街のファンを増やせ！
ふるさと納税寄附者向けのツアー企画

case
001

ふるさと納税感謝ツアー

#ふるさと納税

#着地型ツアー

#街歩き

#TRUST BANK

#富士山課



富士吉田市のふるさと納税は、年1~2回寄附者向けに無料で招待するおもてなしツアーを実施している。富士北稜高校と市ふるさと納税の連携の一環として、北稜高校観光コースの生徒18名が実際のツアー内容を考案し、当日の案内役まで務めるというプログラムが実現した。一般的な観光スポットだけでなく、はじめて訪れた方にも富士吉田市のファンになってもらえるような、隠れた魅力や高校生の視点で「良い!」と思ったポイントを巡るツアーを5コース考案。その中で優れた2コースに絞り、全生徒で最高のおもてなしの準備を行った。バスの添乗員、うどん作り、街歩き案内人など、それぞれに役割をこなした。終わってみれば、泣いちゃう人もいるくらい、大満足の1日となった。



富士吉田市内

メンバー：富士北稜高校
総合ビジネス系列
観光コース 18名
期間：2018.4~2019.2

はじめましての大人を案内する、現場力！

ツアーを企画し提案するところまでは、生徒たちも不安は無かったかもしれない。しかし、今回は添乗員や案内人を務め、初対面の大人と直にコミュニケーションを取り、段取り通りに進めなければいけなかった。大人たちが補助していたとは言え、生徒の脳内も自発的にグルグルしていたはず。

pickup

上記取り組みは富士北稜高校ならでの授業だ。観光人材育成のために、さまざまな授業を行っているが、その中で実践的にツアー企画に取り組みめる機会を創出できたことは地域連携の結果だろう。

●課題

対象を拡大しすぎた！教員、地域、かえる舎の役割分担の明確化に着手！

成熟期＝「こたえられることと、こたえられないこと」

●重点施策

パッケージのブラッシュアップと、生徒の成長ポイントの明確化。

●実施概要

探究学習：年間 15 時間 対象：2 学年 500 名ほど

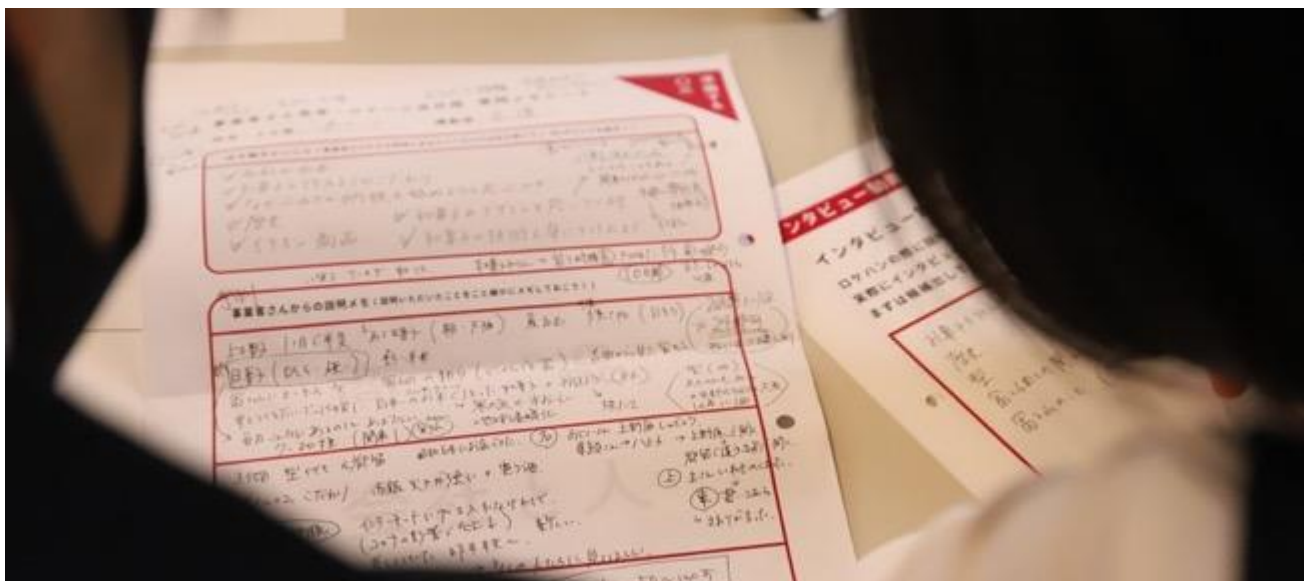
先行者学習集団：40 名

総合ビジネス系列課題研究：計 40 名ほど

●効果

教員、地域、かえる舎、取組の流れを把握できている分、生徒に向き合える時間が増加。

プログラムの改善などに着手。ワークシートへの落とし込み。



●課題

より高いレベルを求められるようになり、生徒の学びとのバランスを検討。

社会の状況に合わせたプログラム構築が求められる。

(4) 活動によって期待される効果

「地域はすごい!」「ここでならできる!」「仲間がいる!」
地域の未来は自分たち次第だという実感の醸成!

本活動が生む 10 年後の未来の可能性

- このまちで働き、暮らしている
- 富士北麓地域を自慢している
- 自分のスキルを地域の活動に還元している

人口減少社会において、若者の活力溢れる社会の創造に向けた一歩目となる。

(5) 今後の課題

「バランス感覚」

学校が学んでもらいたい地域の事業者選択や、テーマ選択においていつも同じ事業者に対応してもらうケースが多い。

一部の事業者に負担が偏らないような配慮が必要だ。

また多くの学校で実践的な地域学習が当たり前になり、多くの学生が善意で活動を行う際に地域側が受け入れきれないという声が多くでてきている。生徒たちが得られる学びを最大化できるために、プログラムの組み方が一方的にならないような工夫や、折り合いをつけるバランス感覚が大切だ。

(5) おわりに

「富士吉田のために」と動き出した卒業生たち

教育は成果がでにくいと言われてきたが、そんなことは全くなかった。

「地域で育ててもらったから、次は恩返しをする番だと思って」と地域のために働き始めた卒業生がいる。

「夏休みに戻ってきたから、地域の仕事を伝えるような活動をやりたいんだけど、どうしたらいいかな?」と大学生が地域のために活動を始めてくれている。

あの時、楽しかった地域での活動や、一緒に活動した仲間とまた何かしたいという思いが、彼らの地域のためにという思いを後押ししている。そんな若い世代が活動を継続していけるようにかえる舎としても変わらず応援していきたい。未来がとても楽しみだ。

まいてきた種が、今やっと花ひらき始めている。